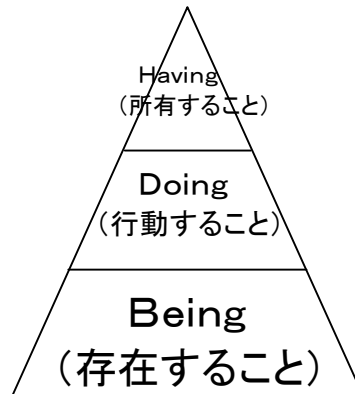


3つのing



わたしたちにとって、自分が存在すること(Being)を周囲から十分に認めてもらえるかどうかというのは、生死にかかわるような大きな問題です。

存在すること(Being)を基盤として、私たちは様々な行動(Doing)を学びます。一所懸命に勉強したり遊んだり、身体を動かしたり冒険したり、新しいことにチャレンジしたり、人に働きかけたり、それらは自分の意志からそうする場合もあれば、周囲からそうさせられる場合もあるでしょう。

そして、このように様々な行動をすること(Doing)を通して、いろいろなものを自分のものとして所有すること(Having)が可能になります。例えば、学歴であったり、知的肉体的能力であったり、地位や名誉であったり、品物や金銭であったりします。

最初に基盤となる存在すること(Being)の部分がしっかりとしたものであればあるほど、その上に行動すること(Doing)や所有すること(Having)をたくさん積み重ねていくことが可能になり、その人の能力も最大限に引き出されます。

しかし、現代の育児や教育、そして企業の中の人間関係は、Beingを軽視しDoingとHavingのみを重要するという、偏った傾向がみられます。育児は、大人にとっての便利さと合理性が追求され、親が手間暇かけてじっくりと子どもを育てることが軽視されています。また、物心ついた時には、幾つもの塾やお稽古事に通わされ、毎日ハードなスケジュールで生活している子どもが増え続けています。

このような教育は、子どもの子どもの存在(Being)を十分に認め大切にするというよりも、将来のために今何をすべきか、つまり、Havingのために何をどのようにDoingするかに極端に偏ったアンバランスなやり方であると言えます。その結果生じてきたのが、思春期から大人に至るまでの、幅広い年齢層での無気力化傾向や自己存在感の希薄さ、対人関係の難しさ、そして、個性や創造性の喪失といった、人間の存在そのものにかかわる難しい問題…。

Beingを重視し、そこをしっかりと固めた上でDoingやHavingを積み重ねていくことは、時間と労力がかかるという側面は確かにあります。しかし、全体的長期的な視野に立つと、それは、人間やその集まりである企業にとって重要なものであり、それによって一人ひとりの個性や創造性が発揮されます。